

中央大学の歴史

創立期	141年前	
創立者：増島六一郎ら 若き18人の法律家 建学の精神 「實地應用ノ素ヲ養フ」 大日本帝国憲法発布 民法典論争 民法施行 専門学校令発令 大学昇格運動	1885 (明治 18) 年	英吉利法律学校創設 東京神田錦町2丁目2番地 校内生97人 校外生制度発定、校外生420人
	1889 (明治 22) 年	東京法学院と改称 『法学新報』に「民法出テ>忠孝亡フ」掲載
	1898 (明治 31) 年	東京法学院大学と改称
	1903 (明治 36) 年	中央大学と改称
	1905 (明治 38) 年	経済学科設置 創立20周年記念式典
	1909 (明治 42) 年	商業学科設置
	1911 (明治 44) 年	学友会発定
大学令公布 旧制中央大学 ← 106年前	1918 (大正 7) 年	
	1920 (大正 9) 年	大学令による中央大学設置認可 法、経済、商学部、大学院、大学予科設置
駿河台移転	1926 (大正 15) 年	神田錦町から神田駿河台へ移転
	1931 (昭和 6) 年	夜間学部開設
	1935 (昭和 10) 年	創立50周年記念式典
太平洋戦争	1941 (昭和 16) 年	報国隊結成 繰り上げ卒業開始
	1942 (昭和 17) 年	学友会を奉公団に再編
	1943 (昭和 18) 年	出陣学徒壮行会
学徒出陣、私学統廃合問題	1944 (昭和 19) 年	中央工業専門学校設立
	1945 (昭和 20) 年	
第二次世界大戦終結	1946 (昭和 21) 年	学友会新発定 女子学生誕生
	1947 (昭和 22) 年	
学校教育法公布	1948 (昭和 23) 年	通信教育部開設
新制中央大学 ← 77年前	1949 (昭和 24) 年	新制大学発定 法、経済、商、工学部開設
	1951 (昭和 26) 年	文学部開設
	1953 (昭和 28) 年	旧制学部閉校祭
高度経済成長	1955 (昭和 30) 年	創立70周年記念式典
	1957 (昭和 32) 年	白門祭開催
	1962 (昭和 37) 年	後楽園キャンパスに新校舎完成 工学部を理工工学部に改組
	1965 (昭和 40) 年	創立80周年記念式典 学部在籍学生数約4万2,000人
マスプロ教育	1966 (昭和 41) 年	学生会館問題
中大紛争	1969 (昭和 44) 年	学費値上げの白紙撤回
	1977 (昭和 52) 年	大学運営をめぐる常置委員会問題
多摩移転 ← 48年前	1978 (昭和 53) 年	多摩校舎落成・創立90周年記念式典 多摩キャンパス開校
	1980 (昭和 55) 年	文系4学部 (法・経済・商・文) 移転
	1985 (昭和 60) 年	駿河台校舎閉校祭
	1985 (昭和 60) 年	創立100周年記念式典
	1993 (平成 5) 年	総合政策学部開設
都心展開 専門職大学院 社会人向け大学院	2000 (平成 12) 年	市ヶ谷キャンパス開校
	2002 (平成 14) 年	多摩キャンパス 災の塔完成
	2003 (平成 15) 年	多摩キャンパス グリーンテラス 白門プロムナード、Cスクエア完成
	2010 (平成 22) 年	市ヶ谷田町キャンパス (ミドルブリッジ) 開校 創立125周年記念式典
	2015 (平成 27) 年	創立130周年 Chuo Vision 2025公表
	2019 (平成 31) 年	国際経営学部、国際情報学部開設
	2020 (令和 2) 年	グローバル館・国際教育寮開館
文理融合	2021 (令和 3) 年	FOREST GATEWAY CHUO開館 中央大学ELSIセンター開設
	2023 (令和 5) 年	AI・データサイエンス全学プログラム開設 茗荷谷キャンパス開校 法学部・法学研究科移転 小石川キャンパス開校
	2024 (令和 6) 年	駿河台キャンパス開校 ロースクール・ビジネススクール移転
	2025 (令和 7) 年	法と正義の資料館開館、大学史資料館開館
	2026 (令和 8) 年	創立140周年 理工工学部を再編し、基幹理工工学部・社会理工工学部・ 先進理工工学部を開設

白門の由来

中央大学を象徴して「白門」と言うことがあります。

明治維新の余韻が残る1885 (明治18) 年、18人の若き法律家達が「實地應用ノ素ヲ養フ (じっちおうよらのそをやしなう)」ことを旗印に、中央大学の前身である英吉利法律学校を創設しました。

彼らは、当時国内で主流だったフランス法ではなく、実社会と密接に結びついた英米法を学ぶことこそが、わが国の司法制度の確立と近代化を達成するために役立つと考え、英吉利法律学校での教育を通じて近代社会にふさわしい人材を育成しようとしたのです。

新進気鋭の講師達による熱心な講義、実学を重んじた教育を特色とする本学には、将来法律家として社会の正義・公正を実現しようという高い志をもった青年達が数多く集い、研鑽しあい、学窓を巣立っていきました。

昭和初年 (1920年代半ば) には、学生歌に「白門」という言葉があらわれています。史実で確認できる「白門」の初出です。作詞者は、後年、白色は徽章の白から、門は当時他大学でも言われた「同門」を意味する門を組み合わせたものと語っています。同時期、応援団が作った応援の小旗は「潔白を示す白でCHUOと染めた」とあります。また、同窓会が白門会を名乗るようになっていくのもこの時期です。

大学が公式に「白門」ということばを使ったのは通信教育部の機関誌『白門』 (1949年創刊) が最初で、翌年には校歌の歌詞に登場しています。

卒業生のなかには私学出身者としてはじめて法学博士となり、のちに「花の弁論」と謳われた弁護士の花井卓蔵や、1945 (昭和20) 年、戦争が激しさを増すなか、身命を賭して翼賛選挙無効判決を下した大審院判事吉田久、また戦前戦後を通じ一貫して国家主義を批判し自由主義思想に基づいて言論活動を続けた長谷川如是閑など、優れた見識のある法曹家やジャーナリストとして歴史にその名をとどめた者も少なくありません。

140年の歴史のなかで培われてきた批判精神を忘れない自由な学風は、「白門」という言葉とともに今も中央大学のなかに確かに息づいています。

建学の精神

中央大学は、1885 (明治18) 年、18人の若き法律家達によって「英吉利法律学校」として創設されました。

創立者達がこの学校を設立した目的は、イギリス法 (英米法) の長所である法の実地応用に優れた人材を育成するために、イギリス法の全科を教授し、その書籍を著述し、その書庫を設立することにあります。

創立者達の「建学の精神」は、抽象的体系性よりも具体的実証性を重視し、実地応用に優れたイギリス法についての理解と法知識の普及こそが、わが国の独立と近代化に不可欠であるというものでした。それゆえ「實地應用ノ素ヲ養フ」教育によって、イギリス法を身につけ、品性の陶冶された法律家を育成し、わが国の法制度の改良を目指したのです。

創立者達は、イギリス法が明治の日本を近代的な法治国家にするために最も適していると確信し、経験を重んじ自由を尊ぶイギリス法の教育を通して、実社会が求める人材を養成しようとしたのでした。

校章



校章は「大学」の学という字の中に「中央」の2文字をたくみにあしらったデザインです。

かつては白色のデザインの襟章・帽章が制服・制帽に使われていました。また、制服のいわゆる金ボタンのデザインにも応用されていました。現在では、校章指定基準で、ここに掲げた基本デザインのほかに白色、紺地に白抜きデザインを定めています。

ユニバーシティ・メッセージ

「行動する知性。— knowledge into Action —」

中央大学校歌

石川通雄 作詞
坂本良哉 作曲

力強く行進曲風に ♩ = 116

く　　さ　の　み　ど　り　に　か　ぜ　か　お　る　お　か　に　ま　は　ら　
 ゆ　き　は　く　も　ん　を　し　た　い　つ　ど　え　る　わ　
 こ　う　ど　が　ま　こ　と　の　み　ち　に　は　げ　み　つ　つ　は　
 え　あ　る　れ　き　し　を　う　け　つ　た　う　あ　あ　ち　う　お　う　わ　れ　
 ら　が　ち　う　お　う　ち　う　お　う　の　な　よ　ひ　か　り　あ　れ

二、よしや嵐は荒ぶとも
 揺るがぬ意気ぞいや昂く
 春の驕奢の花ならで
 みのりの秋やめざすらむ
 学びの園こそ豊かなれ
 ああ中央 われらが中央
 中央の名よ誉あれ

一、草のみどりに風薫る
 丘に目映き白門を
 慕い集える若人が
 真理の道にはげみつ
 栄ある歴史を承け伝う
 ああ中央 われらが中央
 中央の名よ光あれ

三、いざ起て友よ時は今
 新しき世のあさばらけ
 胸に血潮の高鳴りや
 湧く歌声も暗れやかに
 自由の天地ぞ展げゆく
 ああ中央 われらが中央
 中央の名よ栄あれ

中央大学校歌

あゝ中央の若き日に (中央大学応援歌)

中央大学学友会選定
吉岡 新 曲 作 曲

力強く大きく ♩ = 112

あ　こ　が　れ　た　か　く　そ　ら　ひ　ろ　く　
 り　そ　の　ひ　か　り　あ　や　な　せ　る　あ　
 あ　ち　う　お　う　の　わ　か　き　ひ　に　
 で　ん　と　う　ほ　こ　る　は　く　も　ん　の　
 た　た　か　い　い　ど　む　は　た　あ　お　げ　ち　か　
 ら　ち　か　ら　ち　う　お　う　ち　う　お　う

二、情熱と力の若人が
 精鋭こそりふるいたつ
 あゝ中央の若き日に
 雄叫ぶ血汐 紅は
 闘魂たぎる火と燃える
 力 力 中央 中央

一、憧れ高く空ひろく
 理想の光あやなせる
 あゝ中央の若き日に
 伝統誇る白門の
 闘い挑む旗揚げ
 力 力 中央 中央

三、我らが誇り覇者の歌
 燦たり栄光我が生命
 あゝ中央の若き日に
 今ぞ座らん覇者の座に
 いざ勝どきを掲げんかな
 力 力 中央 中央

あゝ中央の若き日に (中央大学応援歌)

惜別の歌

島崎 藤村 作詞
藤江 英輔 作曲

と　お　き　わ　か　れ　に　た　え　か　ね　て　
 こ　の　た　か　ど　　の　に　の　ほ　る　か　な　
 か　な　し　む　な　　か　れ　わ　が　と　も　よ　
 た　　び　の　こ　ろ　も　を　と　と　の　え　よ

三、君がさやけき目のいろも
 君くれないのくちびるも
 君がみどりの黒髪も
 またいつか見んこの別れ

一、遠き別れに耐えかねて
 この高樓に登るかな
 悲しむなかれわが友よ
 旅の衣をと、のえよ

二、別れといえは昔より
 この人の世の常なるを
 流る、水をながれば
 夢はずかしき涙かな

四、君の行くべきやまかわは
 落つる涙に見えわかず
 袖のしぐれの冬の日に
 君に贈らん花もがな

惜別の歌